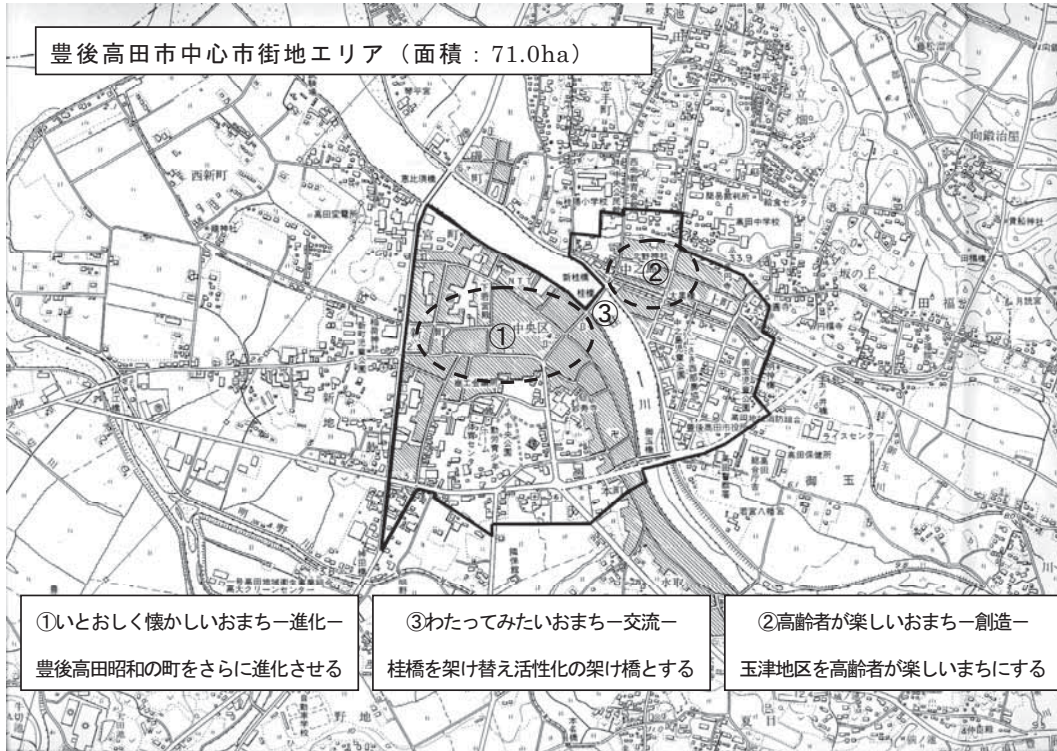


豊後高田市中心市街地活性化基本計画～過去を検証し、未来に向けて～

豊後高田市商工観光課商工労政係長 丸山野 幸政



1. 概要及び状況

豊後高田市 - 大分県の北東部、国東半島の西側に位置し、総面積 206.6km²、人口は 24,475 人（H22 年 8 月末現在）の小都市である。

豊後高田市中心市街地活性化基本計画は、平成 19

年 5 月に内閣総理大臣の認定を受けた。市の中心部を流れる桂川により二分されている中心市街地の特色をいかして、活性化の目標を設定している。

基本計画の詳しい内容は下記 URL を参照

http://www.city.bungotakada.oita.jp/kanko/page_00003.html

（1）目標、指標、その達成の状況等（H22 年 3 月時点）

目標	目標指標	基準値	目標値	最新値
いとおしく懐かしいおまち—進化—	昭和の町の年間観光入り込み客数	259,647 人 (H17 年)	400,000 人 (H23 年)	333,488 人 (H21 年)
	昭和の町の観光客滞在時間(2時間を超える個人の割合)	26% (H18)	36% (H23 年度)	28% (H20 年度)
高齢者が楽しいおまち—創造—	玉津地区高齢者交流施設の入り込み客数	-人 (H18 年度)	3,600 人 (H23 年度)	平成 22 年度 フォローアップ 予定

(2) 各事業の進捗状況

事業種別	計画登録 事業数	実施済み 又は実施 中の事業	未着手の事 業
市街地の整備改善	6	6	
都市福祉津施設整備	1	1	
商業活性化	31	30	1
公共交通機関の利便性 の増進	1	1	

2. これまでの取り組み経過

(1) 平成19年度～華々しくスタートした活性化元年～

衰退が進む商店街の振興に観光を - 商店街が最も栄え華やかだった“昭和30年代”をテーマとして取り組みはじめた豊後高田昭和の町。その拠点施設として、昭和ロマン蔵の唯一未整備であった北蔵を、昭和の暮らしが体感できる『昭和の夢町三丁目館』として整備、4月29日『昭和の日』にオープンの日を設定した。

新たな拠点施設、昭和の町自体の魅力、そして昭和の日に照準を合わせた戦略的な取り組み、これらの魅力をパッケージにして広告宣伝に努め、結果として観光客数は、前年の275,260人から361,320人と飛躍的に増加した。ゴールデンウィークに観光客で埋め尽くされた商店街の姿は“本当に昭和30年代のにぎわいがよみがえったようだ”と関係者の間から聞かれるなど、正に活性化元年にふさわしい年となった。



昭和の夢町三丁目館オープン

この年、これまで昭和の町活性化の効果が現れてなかった桂川により二分されたもう一方の商店街 - 玉津商店街において、旧金融機関を使用して、

地産そばを使った『そば打ち道場まつり』が初めて開催されるなど、中心市街地全体の活性化機運が高まった。

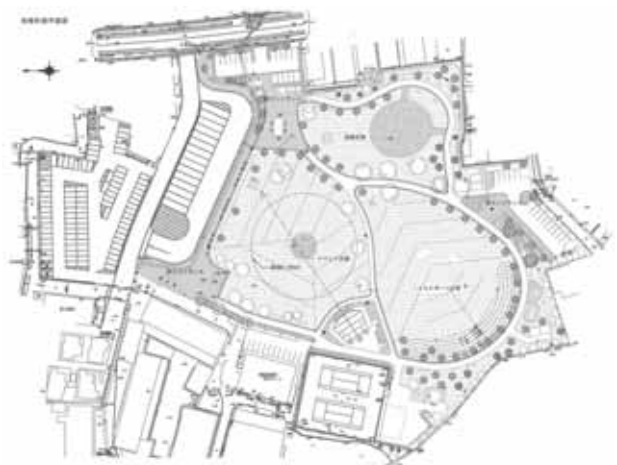
(2) 平成20年度～突如襲った世界同時不況・実施に向けての“校正”～

この年の4月29日・昭和の日には、まちなかに眠る昭和の建築物を活用して、『昭和の町展示館』をオープン。市民から寄贈を受けた昔懐かしい映画ポスターを展示する施設として、昭和の町に新たな魅力が付加され、ゴールデンウィークは、昨年に引き続き大勢の観光客でにぎわい、上々の滑り出しとなった。

しかし、この年の秋、世界同時不況が発生。昭和の店の修景事業も前年の3店舗から1店舗へ減少し、観光客も全体として減少。結果的には361,320人から306,844人と、これまで右肩上がりの増加を続けていた昭和の町は、その誕生から初めて観光客の減少を経験した。

多くのにぎわいを見せていた前年 - 関係者では一抹の不安を抱えていた。『確かに順調だ。しかし果たしてこれが続くのか。一過性のものではないか』と。

客観的に分析すると、新拠点施設、昭和の店の拡大といった『進化』という部分では、平成20年度は低下した年であった。その結果が数字として表れた。『やはり活性化のためにはまちは変わり続ける必要がある』



全面的に見直した中央公園整備方針

平成21年度から本格着手に入る予定であった中央公園整備事業。当初は、旧市営保育園を公園として取り込み、公園の一部を大型バス駐車場へ、そして既存施設をできるだけ残す基本コンセプトで改修

を計画していた。

行政のみならず関係者が抱いていた一抹の不安の中、再度、公園整備について、住民を交えて徹底的に議論。そこで出された結果は『公園整備計画の大幅見直し。中途半端な整備ではなく、真に魅力ある公園へ』

公園の整備範囲をすべてのエリアへ“校正”。既存施設をすべてゼロベースで見直し、最終的には中心市街地において、2.2haもの広大な面積を誇る都市公園の利点をいかし、広大な芝生広場、大型コンビネーション遊具、活発に活動できる子どもスポーツ広場、3,000人規模のイベント、大型ステージを完備するイベント広場と全面的に姿をかえた公園整備計画を策定した。

また、この動きと相まって、まちなかに眠る遊休地を活用した新拠点施設についても“校正”。『安易なアイデアではだめだ、もう一度じっくり検討しよう』と事業着手の期間を延期した。さらに、まちづくりを支えるには人材の育成が必要であると痛感したため、『続・昭和の町づくりによるキラリと光る雇用創出大作戦』を関係機関と共同して策定、厚生労働省の地域雇用創出事業の採択を受けて、まちづくりに携わる様々な人材育成を翌年度から3箇年にわたって行うこととした。

(3) 平成21年度～玉津活性化本格実施～

桂川により二分される玉津商店街の活性化は、もう一方の高田側商店街にある公園整備、新拠点施設の“校正”作業の影響もあり、若干の遅れが生じていた。しかし、見直し作業に一定の目処をつけ、公園改修は順調にスタートし、新拠点施設は新たにワーキング会議を設置し議論を本格的にスタートした。こうして、玉津地区活性化に向けて、いよいよ本格的に着手することとなった。

着手するに当たり、基本計画にそったコンセプトをもとに『玉津活性化戦略』を策定。実施に向けてより具体的な指針を関係者と協議し策定した。高齢者が楽しいおまち・創造・にそって、4つのテーマを設定。『遊ぶ・食べる・集う・交流する』

遊ぶ＝玉津商店街の空き店舗を活用して、囲碁・将棋、スマートボールが楽しめる遊戯館を商工会議所が開館。市が全面的なバックアップを行った。

食べる＝本市の農業振興の新たな柱となった“そば”を活用して、まちなかの手打ちそば屋2号店の

開店に向けて、市が用地と建物を取得。豊後高田市観光まちづくり株式会社のコーディネートにより、需要調査に基づく店舗基本コンセプト、改修計画、出店予定者との綿密な打ち合わせ、広告戦略等の検討を行った。(平成22年7月オープン)

集う＝玉津商店街に眠っていた旧金融機関空きビルを市が取得。商店街活性化の新たな起爆剤として元気な高齢者向けのデイサービスを行うための施設として、その運営に携わる民間事業者を公募。関係者を含めた審査会により選定された事業者と歩調をあわせて、建築物の改修工事を行い、併行して人材育成事業により魅力あるデイサービスの研究を行った。(平成22年4月オープン)

交流する＝玉津商店街の新たな起爆剤として、農業面も一体的に振興するため、地域の農産物を販売・加工する“まちなかの駅”整備を決定。基本コンセプトの設定、実施設計、建設工事を行った。併行して、施設経営などの人材育成の取り組みも行った。(平成22年7月オープン)



待望のボンネットバス・昭和ロマン号

また、これらの取り組みにあわせて、市民の公共交通機関として、重要な役割を果たしていた市民乗

り合いタクシーを玉津地区へ導入するなど、玉津地区の活性化に向けて本格着手した年となった。

昭和の町においては、まちに強力な魅力をとという合い言葉のもと、関係者の悲願であった昔懐かしいボンネットバス“昭和ロマン号”が誕生した。できるだけ本物の部品を使用してレストアしたボンネットバスは、観光客のみならず、市民にも大人気を博し、観光客数は、333,488人と厳しい状況の中でも持ち直した。

(4) 平成22年度～着実に進む活性化事業～

玉津地区は、4月から続々と新たな施設がオープンした。金融機関を活用した元気な高齢者向けのデイサービスを行う施設は、市内から毎日違う人が訪れている。サービス終了時には、商店街での買物時間を設け、生鮮食品関係を中心に着実な効果が出ている。また、隣接するお寺の住職がお説教を行ったりと地域全体と連携した取り組みを行っている。新たな手打ちそば屋は、玉津商店街では2軒目となるが、それぞれの店舗に相乗効果が生じている。

まちの駅については、新鮮な野菜などを扱った品ぞろえが市民にも大変好評な上、隣接するデイサービス利用者の昼食も担い、福祉と農業の連携という新たな動きも出てきた。

このような動きにあわせて、高齢者にとって真に魅力ある・聞いただけで訪れたいようなまちになって欲しいという願いを込めて、まちのキャッチコピーを市民に公募。最上級のお祝いにも使用される『プラチナ』という言葉を用いて、玉津商店街一帯を『昭和の町・玉津プラチナ通り』と名付けた。



元気な高齢者向けのデイサービス施設・玉津座銀鈴堂

昭和の町に隣接する中央公園も着々と完成に向けて、順調に事業が進んでおり、『早く完成させて欲しい。早く遊びたい』と子どもたちからありがたい“要望”をいただいている。

本年においても、依然として厳しい状況が続く経済状況の中、昭和の町に訪れる観光客は、団体客が減少し、個人客が増加している。まちをコーディネートする観光まちづくり会社でも、早速、その状況に対応するため、新たなルートマップづくり、貸し自転車の取り組みなど、その状況に応じて民間企業ならではの“校正”を迅速に行っている。

現在、人材育成面では、地域雇用創造推進事業の2箇年目の取り組みとして、高齢者向けの店舗育成、顧客を拡大するためのネット販売研究、新たな昭和の町のお土産品研究など様々な取り組みを進めている。

3. 昭和の町生誕10周年～過去を検証し、未来に向けて～

昭和の町は平成13年度に“オープン”した。この9年間の取り組みで豊後高田市は、まちづくりにおいて次のことを学んだ。

まちの活性化を図るためには、行政のみならずすべての関係者が総力戦で挑む必要がある。まちの活性化を図るためには、次から次へと魅力を高めていく必要がある。まちの活性化を図るためにはそのまちの品質はしっかり確保する必要がある。まちの活性化を図るためにはその魅力で訪れる方々に対してきちんとした対応の体制整備を図る必要がある。さらなる活性化を図るため、人材育成面も含めてこれらの取り組みを継続的・総合的に行う必要がある。

平成23年度は、昭和の町生誕10周年を迎える。過去を検証し、未来に向けて＝リニューアルされた公園など新たな施設、昭和の町全体を活用した取り組み、昭和の町本来の主人公である商店街の強化、既存施設のリニューアル、玉津プラチナ通りにおける新たな仕掛けづくりなど、豊後高田市はさらなる活性化に向けてチャレンジを続けます。『小さくてもキラリと光るまちに向けて』

(まるやまの ゆきまさ)